

当院看護師の災害・防災に対する認識の一考察

1階東病棟

○ 梶田 賢 伊藤 通子 岩永 佐織
土井 啓子 山口 奈美

キーワード：災害看護、防災意識、看護師、防災訓練

I. はじめに

阪神大震災以後、災害看護学会が設立され、災害時の看護師に対する期待が高まってきている。当院においてもEナースが組織され、「災害時における対応マニュアル」が作成されている。21世紀前半に40%の確率で南海大地震が発生すると言われており、その規模もマグニチュード8.4で津波の高さも8メートルと予測されている。

阪神大震災以後、災害看護への取り組みが活発になってきたが、看護師の災害看護に対する認識の低さ・取り組みの度合いの低さが指摘されており¹⁾、災害看護への認識を高め、準備状況を整えていくためには、看護師の災害・防災に対する認識を知ることが必要である。また、阪神大震災のような大災害時には看護師、患者ともにパニックに陥る可能性があり、そのような状況下においてパニックに陥らず行動がとれるためには、看護師一人一人が行うべき行動を理解し、災害対策の意識を持つことが重要である²⁾。そこで、当院看護師の現在の災害、災害時の看護及び防災に対する認識を知ることが目的に本研究を行った。

II. 研究目的

当院看護師の災害、防災に対する認識を知ることが目的とする。

III. 用語の定義

災害＝暴風、豪雨、洪水、高潮、地震、津波、噴火、その他の異常な自然現象により生ずる被害

災害対策＝地震・台風などの自然現象などによって受ける思わぬ災いに対し事前に対策を考え、二次的な災いに対してその損害を減らそうとする方法・手段

防災意識＝地震・台風などの自然災害に対する自覚・態度

Eナース＝Emergency ナースの略称、災害救助などの危機管理を行うチーム

ACLS＝救急蘇生チームの総称

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

質的研究

2. 対象数・特質

当院看護師で、本研究の目的・意義を説明し了承を得ることが出来たもの10名

3. データ収集期間

8月上旬～9月上旬まで

4. データ収集方法

半構成的インタビューガイドを作成し、それに基づき30分～1時間程度の半構成的面接を行った。インタビューガイドの作成にあたり、前もってインタビューガイドに基づくインタビューのシミュレーションを行い修正した。面接の場所は1階東病棟サブナースステーションで行った。面接内容については、対象者の承諾を得た上でテープに録音した。

5. データの分析方法

面接内容を逐語録に起こし、認識について表現されている箇所を抽出し、コード化した。その後、類似し

た内容をカテゴリーに分け、各カテゴリーに命名をした。

V. 倫理的配慮

1. 対象者に研究の目的及び方法について説明した。
2. 対象者の権利を守るために、以下のことを説明した。
 - 1) 研究の協力は自由意志であり、協力を同意した後でもいつでもこれを撤回できること
 - 2) 研究に協力しなくても職業上の不利益を被らないこと
 - 3) 対象者のプライバシーを厳守し、得られたデータは研究目的以外には使用しないこと
 - 4) 研究終了後データは破棄することを約束する
3. 研究結果の公表について説明した。
4. プライバシーが保護された環境で面接を行い、了承を得た上でテープレコーダーに録音した。
5. 録音したテープや資料は保管し、看護研究発表終了後に破棄する。

VI. 結果

対象者は当院に勤める看護師10名で、女性9名、男性1名である。年齢は25歳から47歳で平均年齢は33.7歳であった。看護師経験年数は1年から26年で平均10.5年、副師長3名、Eナース2名、ACLSナース1名がいた。この中で、災害看護経験者は1名であり、被災経験者は3名であった。対象者の全員が何らかの防災訓練に参加した経験があり、参加のきっかけは全員が上司にすすめられて参加していた。災害時における対応マニュアルを見たことがあると答えたのは5名、見たことがないと答えたのは5名であった。

1. 当院看護師の災害・防災に対する認識の構成要素

本研究において【災害に対する認識】【災害時の看護の役割・機能に対する認識】【防災に対する認識】の3つの大きなカテゴリーが抽出された。

2. 災害に対する認識

【災害に対する認識】とは、災害が起きた際に看護師としてどのように思い感じるかという理解であり、『パニック』『危害』の2つのカテゴリーが抽出された。『パニック』とは、災害に直面した際にパニック状態に陥るであろうという理解である。これは「混乱」「恐怖」の2つのカテゴリーで構成されていた。『危害』とは、災害によって受ける被害への理解であり、「被害が大きい」「想像ができない」の2つのカテゴリーが抽出された。

3. 災害時の看護の役割・機能に対する認識

【災害時の看護の役割・機能に対する認識】とは、災害が起きた際に看護師としてどのような行動が必要であるかという理解であり、『災害時の看護の価値観』『災害時の対処に対する考え方』『自己保護と役割の葛藤』の3つのカテゴリーが抽出された。『災害時の看護の価値観』とは、災害が起きた際に看護師としてどのような判断をするかという理解である。これは「患者を優先する」「心の安寧を図る」の2つのカテゴリーで構成されていた。『災害時の対処に対する考え方』とは、災害が起きた際にどのように対処行動をとるかという理解である。これは「自分の役割を果たす」「判断ができる人に従う」「互いに協力する」の3つのカテゴリーで構成されていた。『自己保護と役割の葛藤』とは、看護師として役割を遂行しようという思いと、自然に湧いてくる自分を守ろうという思いとの間の葛藤である。これは「役割遂行への不安」「自分を優先する」「自分の家族を優先する」の3つのカテゴリーで構成されていた。

4. 防災に対する認識

【防災に対する認識】とは、防災訓練・災害準備などの意義・必要性に対する理解であり、『防災に対する姿勢』『心がけ』の2つのカテゴリーが抽出された。『防災に対する姿勢』とは、防災訓練などに対する参加の姿勢、必要性への理解である。これは「積極的な姿勢」「消極的な姿勢」の2つのカテゴリーで構成されていた。『心がけ』とは、日々の業務の中で行っている災害への備えである。これは「日頃から心がけておくこと」のみ抽出された。

VII. 考察

【災害に対する認識】では、『パニック』『危害』という2つのカテゴリーが抽出された。多くの対象者は被災経験がなく、漠然とした混乱や恐怖を感じているのに対し、実際に阪神大震災を経験したことのある看護師は「地震への恐怖」という地震そのものに対する恐怖を感じていた。

【災害時の看護の役割・機能に対する認識】では、[災害時の看護への価値観][災害時の対処に対する考え方][自己保護と役割の葛藤]の3つのカテゴリーが抽出された。

【災害時の看護への価値観】では「まず患者の命を優先する」「患者を助けることが一番大事」など『患者を優先する』という認識が大半を占めていた。北村³⁾らは「看護師は患者中心の看護を教育され、すぐにでも患者の状況を把握したいと行動する」と述べている。これはこれまでの受けてきた教育から得られた看護師としての価値観に基づき行動しようとする認識と捉えた。『心の安寧を図る』というのも看護師としての価値観に基づくものであり、かつ阪神大震災後 PTSD などに対する精神的ケアの必要性や重要性が大きな問題として取り上げられたことによるものと考えられた。

【災害時の対処に対する考え方】では『自分の役割を果たす』『判断ができる人に従う』『互いに協力する』の3つのカテゴリーから構成された。これらは、災害は日常的に起こりうるものでないことや、予期せぬ出来事に遭遇した場合や未知の体験に対しては自分で判断し行動することは難しいと考えていること、また災害時は患者であれ看護師であれ、被害を受けるのは同じであると考えられる。また、児島⁴⁾らは「いざという時どのような行動をとれば良いか、日頃から災害看護の教育・訓練を実施し危機管理能力を養う必要がある。また自主的に役割行動がとれるよう、役割分担の明確化と訓練が必要である」と述べている。

【自己保護と役割の葛藤】では『役割遂行への不安』『自分を優先する』『自分の家族を優先する』の3つのカテゴリーから構成されていた。岡田⁵⁾らは「出勤するという意思決定を行った被災看護職者には使命感があり、出勤しないという意思決定を行った被災看護職者には使命感がなかったというような単純なものではなく、地震の揺れの有無、自分の被災状況の予測、職業役割、病院という場に対する愛着、精神状態など様々な要因が入り混じり、被災看護職者は出勤に関する意思決定を行っていた」と述べている。上記の【自己保護と役割の葛藤】においても、看護師としての使命感を感じながらも様々な要因が入り混じり葛藤していると思われた。

【防災に対する認識】において、【防災に対する姿勢】【心がけ】というカテゴリーが抽出された。【防災に対する姿勢】では「目的別のもにに参加したい」のように防災訓練に対して積極的に取り組むという姿勢と「自分には関係ない」のように自分とは非日常的なものにとらえている消極的な姿勢という相反する二つのカテゴリーで構成されていた。また、全員が何らかの防災訓練に参加はしているものの、参加のきっかけは上司にすすめられてであった。対象に被災経験者が少なく、「実際には活用できなさそう」「めんどくさい」など防災訓練に対して現実感や必要性を感じていない対象者が多いことから防災に対して消極的な姿勢があった。このことから同じ内容の防災訓練に参加をしても、個人々人において取り組む姿勢は異なっており、防災訓練への必要性・意義に対する理解が異なっているのではないかと考えられた。

また【心がけ】において、「患者区分を把握しておく」「無停電回路を使用する」の2つが日頃から心がけておくこととして認識されていたが、これは一般的な内容のものであり、各病棟の特徴を踏まえた上での具体的な内容のものではなかった。これらのことから、日頃から防災に対する意識は低く、日常行っている一つ一つの業務を防災と結び付けて捉えてはいないと思われた。同じ内容の初期消火や避難訓練だけでなく、被災を想定したシミュレーション訓練、各医療従事者、病院スタッフの役割分担行動も含めた訓練が必要と思われた。

VIII. 結論

本研究の結果、当院看護師の災害・防災に対する認識として【災害に対する認識】【災害時の看護の役割・機能に対する認識】【防災に対する認識】が明らかになった。

本研究は、対象者が少人数であったこと、面接技術や分析能力の未熟さ、文献の活用が不十分であったなどの限界があった。これらの点を考慮し、さらに研究をすすめることで、災害に対する意識を高めていけるのではないかと思う。

引用・参考文献

- 1) 西上あゆみ他：病院看護婦への質問紙調査からみた災害看護に関する課題，日本災害看護学会誌，2(1)，34-44，2000.
- 2) 上田さち子他：和歌山労災病院の災害対策意識に関わる調査，日本職業・災害医学会会誌，51 巻臨増，205，2003.
- 3) 北村奈緒子他：看護師の防災意識に関して アンケート調査による一考察から，日本災害看護学会誌，4(2)，52，2002.
- 4) 児島二美子他：芸予地震の被災体験にもとづく防災マニュアルの検討，日本災害看護学会誌，4(2)，53，2002.
- 5) 岡田麻里他：阪神淡路大震災当日の被害看護職者の出勤に関する意思決定の要因，日本災害看護学会誌，4(2)，56，2002.